

月刊

2011

7
月号

みんぱく

特集

海とともに生きる

—あたらしくなったオセアニア展示



海を渡ってオセアニアへ 菊澤 律子

アニメで見る航海術 須藤 健一

島に生きる戦略 印東 道子

ヴァヌアツのパワースポット 白川 千尋

オセアニアの教会衣装集め始末記 丹羽 典生

集散するコレクション 林 勲男

震災の直前、二月末から三月初めにかけてインドネシアに行ってきた。シンガポールで学会が開かれたのを機に、足をのばして、マンガ市場の調査旅行を行うことにしたのである。

シンガポールでもインドネシアでも資本文化が健在であることが確認できるなど、たくさんの収穫があったのだが、なかでも印象深かったのは、「インドネシア漫画の父」と呼ばれるコサシ氏に、直接おめにかかってお話を聞けたことであつた。

現地で案内役を務めてくださったのは、ジャカルタで日本式マンガスクールを開く前山まち子先生。私がインドネシアローカルの漫画にも興味を持つていたことを知った彼女は、なんと私の到着一週間前、インドネシアの古いローカル漫画の復刻を手掛けているという出版社兼書店の代表者と知り合う。さっそく行ったその店ですぐに私の目に飛び込んだのが、伝統的なワヤンスタイルで描かれた、コサシ氏の筆になる『ラーマーヤナ』。そのコサシ氏に会えたのだ！

九〇歳を超えるコサシさんは車椅子こそ使っているものの、かくしゃくとして、何より記憶が確かで、すべての返答が明快極まりない。それまでの取材で、インドネシアでは常にあいまいな返答しか戻ってこないことに慣れていたから、まずこのこ

プロフィール

1959年熊本県に生まれ。評論家、明治大学国際日本学部准教授。漫画、ジェンダー論を中心に、評論活動をおこなう。元編集者でもあり、関心分野における評論書籍等を数多く手がけてきた。おもな著作に『私の居場所はどこにあるの?』（学陽書房）『快樂電流』（河出書房新社）など。



インドネシア漫画の父・コサシ氏と出会う

藤本 由香里

とにびつくりした。

デビュー作である『スリアシ』（一九五三年）は、インドネシア初のコミックブックで、最初は楽器を売るシヨップの片隅に置かれていた。しかしこれが評判を呼び、通信販売であちこちで読まれるようになったという。「インドネシア語で読めるアメリカンスタイルの漫画、しかも衣装や物語の舞台はインドネシア、すごい」というわけだ。私はここで気になっていたことを聞いてみた。

「インドネシアではなぜアメリカンコミックの影響が強いのか？ コサシさんはどこでアメコミを読んだのか？」答えは驚くべきものだった。

「当時、バナナなどを買うと新聞紙で包んでくれた。インドネシアでは新聞紙が足りず、アメリカが古新聞を送ってくれた。そこには、動きのある、見たこともない漫画が載っていた。言葉はわからないけれど、子どもの頃からそれを夢中で模写したんだ」

ルーツは「商品を包んだ新聞紙」。浮世絵が欧米に伝わった時を髣髴とさせるエピソード。そしてコサシさんのスタイルが、後続の漫画家たちに引き継がれていく。頭の中でカチツと音がするような、鍵になる証言。だから調査は面白い、心からそう感じた瞬間だった。



1	エッセイ 千字文 インドネシア漫画の父・コサシ氏と出会う 藤本 由香里
2	特集 海とともにいきる ——あたらしくなったオセアニア展示
3	海を渡ってオセアニアへ 菊澤 律子
5	アニメで見る航海術 須藤 健一
6	島に生きる戦略 印東 道子
7	ヴァヌアツのパワースポット 白川 千尋
8	オセアニアの教会衣装集め始末記 丹羽 典生 集散するコレクション 林 勲男
10	研究フォーラム みんなぱく公開講演会 自然と向きあう人びとの今——太平洋とアフリカに見る 太田 心平
12	みんなぱく Information

14	地球ミュージアム紀行 博覧会から博物館へ 万博・民博・海洋博 宇野 文男
15	みんなぱく 私の逸品 石貨 小林 繁樹
16	散策と思索の径 「されば、いざたて、アルジュナよ」 新江 利彦
18	多文化をささえる人びと 愛川町役場の20年 実践のなかでみつけたもの 窪田 暁
20	歳時世相篇 祖先とともに過ごす夏 中国雲南省ペー族の場合 横山 廣子
22	フィールドで考える 「慈愛」に覆い隠された僧侶のジレンマ 岡部 真由美
24	次号予告・編集後記



特集

海とともに生きる

—あたらしくなったオセアニア展示

見渡すかぎりの大海原。
島という、資源の限られた環境にくらすオセアニアの人びとにとって
海は古来より、食糧をもたらす恵みの場であり、
航海を通じてあらたな可能性を切り開く出会いと交流の場でもあった。
一方この海は、時代の変遷とともに、彼らと外の世界との接触をももたらすことになる。
オセアニアの人びとは、いかにして固有の文化を育んできたのか。
そして伝統的な文化を継承し、発展させていったのだろうか。
新しくなった展示場とともに紹介する。

海を渡ってオセアニアへ

菊澤律子きくさわ りつこ 民俗文化研究部

仮に「オセアニア」を、ニュージーランド島西端からイースター島にいたる地域と定義つけたとしよう。ここでは、いくつの言語がはなされているだろうか？ まず目につくところでは、オーストラリアで約一六〇、ニュージーランド島で約一〇〇〇言語。さらに、それ以外の地域で話される言語は、合計すると優に二五〇を超えている。これだけの数の言語がはなされているということは、地図では一面の海でしかないように見える太平洋にも、たくさん島があり、人が住んでいるということを意味している。それにしても、これらの人びとの祖先はいつ、どのようにして太平洋の島々に到達し、生活を営むようになったのだろうか。

オセアニアへの人類の拡散

オセアニアへの人類の移動には、二回の大きな波があったと考えられている。一回目は、今から五万年ほど前。海面が低かったこの時期、人は東南アジアの島嶼部とうしよからニュージーニア島、そしてオーストラリア大陸へと居住地を拡げた。新しいオセアニア展示場の床に広がる地図をみると、これらの陸地が水色、すなわち浅い海で結ばれていることがわかる。二度目は、今から三三〇〇年ほど前にはじまる移動で、このころにはオセアニアは、海面の高さも含め、今とほぼ同じ



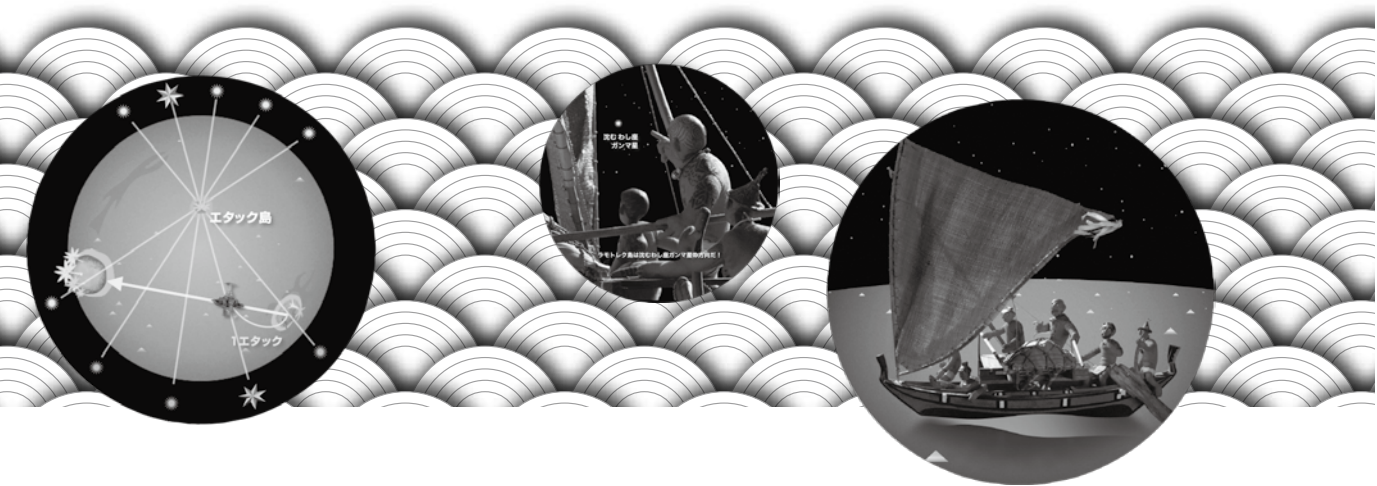
アウトリガーカヌー（模型）
H0130511



カヌー船首の装飾板
H0124259



タコどり用擬餌
H0004759



航海士の知識を見る
 展示場には、星コンパスによる航海を示すアニメがある。サタワルの男たちのカヌー航海の話だ。アニメに登場する一人の航海士と五人の男たちは太め。航海中に風雨にさらされると体温が急降下するので皮下脂肪は不可欠なのだ。アニメで使われたカヌーは島の船大工の手によ

航海士の知識を見る
 展示場には、星コンパスによる航海を示すアニメがある。サタワルの男たちのカヌー航海の話だ。アニメに登場する一人の航海士と五人の男たちは太め。航海中に風雨にさらされると体温が急降下するので皮下脂肪は不可欠なのだ。アニメで使われたカヌーは島の船大工の手によ

とカヌーを導くのだ。
 今もなおサタワルの航海士は、星コンパスをもとに、風向・風力、波や潮流、雲、鳥、魚、海の色や漂流物など、航海中に遭遇するあらゆる現象の特性と要素を組み合わせて位置と針路を割り出す。こうして一〇〇〇キロ離れた島へ

自然を頼りに
 航海術は、船の位置を確認して目的地に到達するための方向と速度をきめる技術である。現在はGPSで自動航海ができる。しかし、磁気コンパス、六分儀や海図など、近代航海器具の恩恵に浴しなかつたオセアニアの人びとは、星と波と風を頼りに数千キロの航海をおこなってきた。なかでも、星・星座の規則性を見抜いて編みだしたのが星コンパスで、古来からの航海術の基本となっている。

アニメで見る航海術

須藤健一 国立民族学博物館長

星コンパス

チェチエメ二号の故郷、ミクロネシアのサタワル島の夜は、男たちが長老の航海士から「航海の星」を学ぶとき。長老たちは毎日、夜明けに東の水平線に昇る星を、夕方は西の空に沈む星を見つめる。数百もの星・星座が輝く時期と出沒位置を知っているという。この知識から「星コンパス」が生まれた。

星コンパスは、一五の星・星座を用いて三二の方位をしめす。北極星は北、南十字座の南中時が南、わし座α星の出現位置が東、その没入位置が西をさす。星コンパスとは、カヌーで航海するときの目的地の方位だけでなく、ある島から見てあらゆる方向にある島の名前を網羅する知識と結びついているし、洋上での位置を割り出すのにも使われる知識体系なのだ。

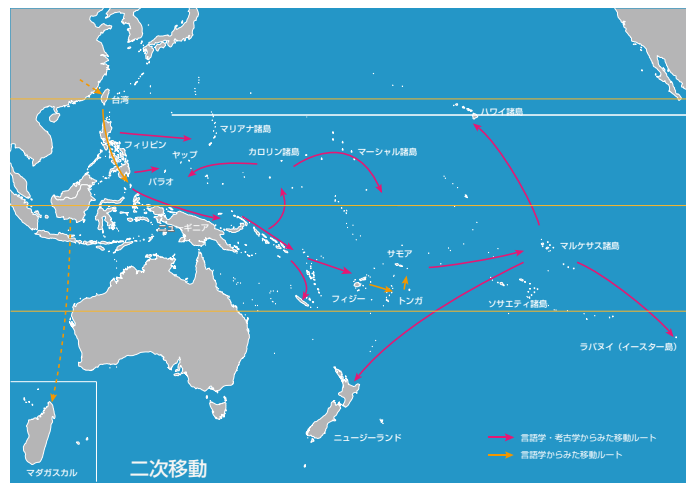
精巧な模型。船首・船尾同型なので向かい風でも帆を船尾に移し船尾を船首にしてジグザグに前進できる。そして、洋上で位置を確認する航法。航海士は島を出発して、島が見えなくなる地点を「エタツク(約二六キロ)とみなし、このエタツク航法を繰り返して目的地にカヌーを近づける。アニメからは、反射波や鳥の習性についての航海士の知識もつかえる。

自然を頼りに

航海術は、船の位置を確認して目的地に到達するための方向と速度をきめる技術である。現在はGPSで自動航海ができる。しかし、磁気コンパス、六分儀や海図など、近代航海器具の恩恵に浴しなかつたオセアニアの人びとは、星と波と風を頼りに数千キロの航海をおこなってきた。なかでも、星・星座の規則性を見抜いて編みだしたのが星コンパスで、古来からの航海術の基本となっている。



オセアニアの人類移動には2回の波があった



展示場にある言語の装置では13言語の単語を聞き比べることができる(写真は装置画面)



復元されたラピタ土器 H0229196

様相を呈していた。にもかかわらずこのあと二〇〇〇年をかけて、人はハワイ、イースター島、そしてニュージーランドへと、太平洋に点在する遠くの島々に到達し、定住するに至る。オセアニアの文化がまだよく知られていなかったときには、漂着を繰り返した結果だという説もあったが、現在では、高度に発達した航海技術をもつオーストロネシアンとよばれる人びとが、意図して新天地への移住を繰り返したのだと考えられている。

土器と言語と
 オーストロネシアンの足跡を知る有用な手がかりのひとつは、複雑な文様をもつラピタ土器で、その分布は、東南アジアからメラネシアをとり、ポリネシアへとつながる人の移動を示唆している。次に、言語。冒頭で述べた二五〇を超える言語の系統関係、すなわち共通祖先から分岐し発達した経緯を、これらの言語が現在話されている位置とつきあわせることで、話者の集団がこの地域でどのようにひろがったのかを知ることができる。さらに近年では、人や家畜の遺伝子の研究もさかんになってきた。

ヨーロッパに先駆けること数千年、オセアニアの大航海時代は、残念ながら記録には残されていない。発掘品やことば、遺伝子などにのこされた情報を手がかりに今、わたしたちは、時間という大きな海原をわたる。



島に生きる戦略

印東道子 民博 民族社会研究部

民博のオセアニア展示場奥が六三センチ高く設計されているのをご存知だろうか。そこにはモアイや仮面など神々を象徴する展示物が並び、遠くからも見えるように工夫されている。今回この段差の前面にゆるいスロープをつけ、島に上陸するイメージで展示をおこなった。

島の暮らしのキーワードは、資源戦略である。豊富な海洋資源に対し、陸上資源には限りがある。周囲を海で囲まれた島環境の特徴だ。特に、サンゴ島の場合は、土壌が貧困で栽培できる植物の種類が限られる。石器を作る石もなければ土器を作る粘土もない。そのような貧弱な環境に暮らす人びとがおこなったことは、①使えるものは徹底的に使うこと、②島にないものは海を越えて手に入れることだった。

ココヤシ
生活用具を作るために利用された動植物の種類の多さは目を引くが、そのなかでもココヤシは各部位が徹底的に使われている。今回の展示では、一本のココヤシを示し、その周囲にココヤシのさまざまな部位で作った生活用品を展示した。年間に四〇〇〜八〇個の



ココヤシの葉でカゴを編む(シグラー環礁 1980年)

実をつける一本のココヤシが提供する飲料水の恩恵は計り知れない。殻の外側の繊維は家やカヌーを作るのに欠かせないココナツロープの素材を提供し、水の漏れない殻は各種の入れ物として使われ、最後には燃料として燃やされる。長さが二メートルもある葉は大量に利用できるもので、使い捨てのカゴや敷物、屋根材、壁材などに利用され、トビウオ漁などに使うたいまつとしても使われる。まさにココヤシは生活全般に資する植物だ。
展示場でも中央におかれた航海用カヌーのチエチエメニ号は、釘をまったく

く使っていない。船体や帆など、あらゆる部材がココナツロープで結ばれている。「こんなところにも！」と驚くところにも使われているので、ぜひのぞき込んで欲しい。

交易

もうひとつの工夫は、近隣の島々との交易である。歴史時代に至るまで、オセアニアにはクラやサウエイとよばれる大がかりな交易網が存続していた。これらを通じてさまざまな物資が島から島へと動く。たとえばマイクロネシアのサンゴ島民は、織物や手工芸品と交換に、土器やウコン染料、赤土などを手に入れた。サンゴ島では入手できないものを火山島からもち帰ったのだ。もちろん婚姻関係につながる出会いもあった。
他方、交易相手との絆は、自然災害時などにおけるライフラインの役割も果たす。島内では解決できない事態を、海を越えたつながりを保っておくことで乗り越えたわけだ。それは島に生きる人びとの重要な生存戦略であった。



交易に使う腰布を織る(フェイス島 2005年)



水入れ(ココナツ殻製) K0000834

ヴァヌアツのパワースポット

白川千尋 民博 先端人類科学研究部

仮面と霊的な存在

オセアニア展示場の正面左奥には、多くの仮面が並んでいる。とはいえず、来館者の方々が個々の仮面をよりじっくりと鑑賞できるようにするため、その数は以前に比べてかなり減っている。それらの仮面を時間をかけてみてゆくと、ひとつひとつがじつにさまざまな素材からなり、色合いやつくられ方もバラエティーに富んでいることがわかるはずだ。他方で、そうした多様性とともに多くの仮面に共通することがらも発見できるだろう。

たとえば、展示されている仮面のなかには、なにやら妖しい雰囲気や漂わせたものが少なくない。そうした仮面はたいがい精霊や祖先の霊などをあらわしている。これらの霊的存在はオセアニアの人びとのあいだで、人知のおよびぬ超自然的な力を持ち、人間に対してさまざまな恵みや災いをもたらすと考えられてきた。そのような霊的存

在をあらわした仮面は、おもに儀礼などで使われる。人びとは儀礼を通じて、仮面によってあらわされた霊的存在の力を、コントロール可能な形にして自分たちの日常生活のなかに取り込もうとしていたのかもしれない。

超自然的な力の担い手たち

ところで、超自然的な力をもつのはなにも霊的存在ばかりではない。少数とはいえ、オセアニア各地には似たような力をもつとされる人びとがいる。たとえば、ヴァヌアツ・トンゴア島の伝統的な治療者のなかには、霊的存在から病気を治す力を授けられ、治療者となった人びとがいる。これは超自然的な力が善きものとして使われている例だが、逆に悪しきものとして使われることもある。邪術がその典型的な例だろう。ヴァヌアツでは、国内に点在する約八〇の島々のなかでも特にアンブリムという島が、強力な邪術の使い

手の存在する島として広く知られてきた。邪術師たちは、ターゲットにした相手の髪や衣服の切れ端などを利用して病気にしたり、サメに変身して海に出ていた相手を喰い殺したりするという。

パワースポット、アンブリム

一方、アンブリムは、パンノキの幹をくりぬいた割れ目太鼓でも知られた島である。地面に立てて使われるこの太鼓は、高さ二メートルを超えるものもあり、ヴァヌアツでは文化的なシンボルのひとつとなっており、紙幣にも印刷されている。オセアニア展示場でもその威容を目にすることができ、太鼓の上の方には精霊の顔が彫り込まれている。精霊をあらわした割れ目太鼓と強力な邪術。超自然的な力に関係するそれらのもので有名なアンブリム島は、さしずめヴァヌアツ随一のパワースポットとでもいえそうだ。



治療儀礼をおこなうトンゴア島の治療者(1995年)

ヴァヌアツ・アンブリム島の割れ目太鼓 K0006979



オセアニアの 教会衣装集め 始末記

丹羽典生 民博 研究戦略センター



展示場にはトンガ、ハワイ、クック諸島の3つの地域の衣装が展示されている



クック諸島民の教会衣装

オセアニア展示の「外部世界との接触」セクションに、教会衣装を紹介するコーナーが登場した。その趣旨は、教会衣装を例に、いわゆる大航海時代以降の西洋など外部世界との接触のなかで、オセアニアの人びとがいかに独自の文化を継承しつつ発展させたかを示すことにある。オセアニアの多くの国々では、キリスト教の影響は目を見張るほど大きい。日常生活に深く根づいているのみならず、民族や社会の集合的アイデンティティの一部にさえなっている。たとえば、オセアニアの人びとの多くは洗礼名をもっており、週末には、宗派ごとに特色のある教会衣装で着飾り、朝から礼拝に出かけ、教会学校に参列し、家族で豪華な食卓を囲む。平日にも、教会のための献金、チャリティ活動、同じ宗派の人びとへのお見舞いのほか、讃美歌の練習も怠らない。しかし、西洋がもちこんだ宗教をそのまま受け入れたわけではなく、現実の教会活動は各地の文化と融合した独自のスタイルを生み出している。教会衣装はそのパリエーションを示す格好の資料なのだ。

クック諸島と、メラネシアのフィジーの四地域の教会衣装を収集し、うち三地域のを展示している。これはすべて、実際に人びとが着用していた、頭から足元までの衣装一式を、現地で交渉し購入したものだ。その際には、さまざまな出来事があった。衣装や布を集めていると伝えると、樹皮布の産地として有名な島出身の老人が、収集品とは別に手土産として樹皮布製の壁飾りを贈ってくれた。かと思えば、どこで聞きつけたのか、ぼろぼろの布切れを買ってくれともち込む人が次から次へとあらわれた。それを見て友人いわく、「ノリオ、金をもつてる奴には友人が増えるんだよ」。また、自分の祖先である一九世紀の首長が着用していた服装を探そうと約束してくれた方もいて、とても払える金額ではないだろうとびくびくしていたら、模造品でほつとしたこともあった。

時間と予算の関係で、集めた衣装の種類には限りがあるが、このコーナーを担当したわたしの思いを多少なりとも伝えることができたなら、何より展示を楽しんでいただけたら幸いである。

集散する コレクション

林勳男 民博 民族社会研究部



シドニー郊外の自宅「キナワヌア」(ナンシー・ジョイス提供)



儀礼用櫂 H0138959

み、学者や博物館などへ収集した資料を寄贈した。さらには、学術誌への論文執筆や晩年には民族誌も出版している。彼の家にあった標本資料は、その収集主の死と共に、遍歴の途に着いたのである。

実現されない遺族の思い

死の翌年、シドニーにあるオーストラリア博物館は、遺族に対しこのコレクションの一部を買い受ける申し入れた。しかし遺族は、分散させることなくブラウンの名を残すひとつのまとまりをもったものとして売却し、博物館に展示・収蔵されることを強く望んだため、交渉はもの別れに終わった。一九二二年、ブラウン財団はブラウンの生まれ故郷である英国のバーナード・キャスルにあるボウズ博物館へコレクションを売却した。しかし同博物館には、十分なスペースがなく、コレクションの一部だけしか展示されなかった。一九五四年、キングズ・カレッジ(現在のニューキャッスル大学)へとコレクションは転売された。大学付属のハンコック博物館が、管理責任を負うことになったが、ここでもコレクションのすべてが展示されることはなかった。しかし、ニューキャッスル大学が財政難から、サザビーを通じて売りに出すまでは、ジョージ・ブラウン・コレクションとして一括保管だけはな



仮面：タタヌア H0144393

あったという。これが今日、ジョージ・ブラウン・コレクションとよばれているものである。

ジョージ・ブラウンは一九世紀中ごろから二〇世紀初頭にかけて南太平洋で活躍したメソジスト教会の宣教師である。彼はキリスト教の布教活動の傍ら、博物学にも関心を抱き、自然史や民族誌の標本収集にも精力的に取り組

されていた。

一九八六年、民博がコレクションを購入したとき、大英博物館、イースト・アングリア大学セインズベリー・センター、バーミンガム市立博物館などが仮面や彫像資料二点を買い取ることがすでに決まっていた。民博は、一九九九年に企画展「南太平洋の文化遺産—ジョージ・ブラウン・コレクション—」を開催し、ブラウンの没後八二年目にして初めて、すべてのコレクションを一般に公開することが実現したわけであるが、それはブラウンの遺品としての民族誌コレクションのすべてではなかった。

あらたな「集約」への試み

いま民博では、ジョージ・ブラウン・コレクションのウェブサイトを立ち上げ、民族誌資料やコレクションの背景を紹介するだけでなく、オーストラリア博物館が所蔵する、ブラウン自身が撮影した約九〇〇点のガラス乾板や、やはりシドニーにあるニューサウスウェールズ州立図書館に収められた、彼のアルバムや書簡類などに関連づける作業を始めている。英国内にとどめ置かれたものも含め、ブラウンから寄贈されたり購入したりして、世界各地の博物館などが所有する資料まで調査が展開できることを期待している。



ブラウンの個人「博物館」(ナンシー・ジョイス提供)



彫像(魚) H0138284



棍棒 H0138523



研究フォーラム

みんなく公開講演会

自然と向きあう人びとの今——太平洋とアフリカに見る

おおた しんぺい
太田 心平

民博 研究戦略センター

民博は、2006年から毎年春に、毎日新聞社と共催でみんなく公開講演会を開催している。
今回は、人類の伝統的な自然観とその変化、そして現在における再評価についてとりあげた。

自然と文化

自然環境とどう向きあうかは、こんにち人びとを悩ませている課題である。ただ、人が自然に向きあいはじめたのは現代のことではない。かねてより人は、自然を敬い、畏れ、あるいは慣れ親しむことによって、自分たちの社会を作り上げてきた。

自然に関する問題意識は、低炭素社会の実現や生物多様性の保持といった点から語られがちである。だが、われわれは同時に、人間社会が古くからもっている自然との向きあい方にも着目する必要があるのではないか。それらがもつ知恵をあらためて吟味し、その実践にどのような変化が起きているのかについて考えてみることも、もうひとつの現代的課題であろう。

「自然」以前の異界の認識

今回の講演会では、アフリカの仮面舞踊とオセアニアの伝統医療というふたつのテーマによる講演がおこなわれた。

アフリカ南部、ザンビアのチェワ社会では、人の死後に喪に服し、一年ほどたつと喪明けの儀礼をおこなう。儀礼は、結社の男性たちが動物の形をした仮面を秘密裏に作って、それをかぶって人びとの前で踊り、最後には森に去っていくというものである。これは、森から来た動物の姿を借りて死者がよみがえり、地上に残した霊を吸収して、

呪術や医療などの知識とその実践によって試みていたのだということが、この講演会でみえてきた。

現代社会での再評価

これらの伝統的な異界との向きあい方は、現代社会で消えゆく運命にあるのだろうか。チェワの社会は、キリスト教の浸透や政治的混乱という激動の時期をへてきた。だが、仮面舞踊は、それらの合間を柔軟にすり抜けるようにして、今も続けられている。

のみならず、近年には彼／彼女らの伝統として、外部者に対しても誇示されるようになってきている。ヴァヌアツでは、病院や保健所が普及し、近代医療が無償で受けられるようになった。ところが、伝統医療の治療者たちも排除されていく。政府から公認のライセンスを受けるようになった。か

つ人びとのあいだでは、近代医療で治療が難しい慢性疾患や難病に対し、

在来の薬草に有効な成分をみいだそうとする動きもみられる。伝統医療は近代医療と住みわけて共存しているという。

どちらの講演でも、伝統的な異界との向きあい



覆面をかぶったニャウの踊り手。ザンビア (1985年 撮影・吉田憲司)



薬草の搾り汁の準備。ヴァヌアツ (1994年 撮影・白川千尋)

人の社会から消えていく過程だと認識されている。こうした仮面舞踊の事例報告からは、生きている人の社会と、それから切り離された森、そして両者を媒介する存在としての森の動物たちという、チェワの人びとの認識方法が垣間みられた。

対して、オセアニアのヴァヌアツでは、人びとの病気を薬草や夢見で治療する治療者がいる。治療者は、治療の知識に特別な価値を置き、それを主として子どもに伝承する。病気というものを、自然がもたらす人の「内なる自然」と考えるならば、病気、薬草、夢の世界は、すべて人の社会と区分

方は、西欧近代的な社会制度や世界認識が導入された後、西欧近代的なシステムのなかで、その管理下に置きうるような、何らかの位置づけにおさまっている様子が報告されたといえよう。それと同時に、西欧近代的な自然との向きあい方とは違った場において、在来のシステムにあらためて重要な価値がみいだされることがわかった。

講演会のもたらしたもの

今回の講演会は、人が自然と交渉する多様な原点を参加者に感じてもらう場であった。それと同時に、現代社会のキーワードとなつている「自然」という概念を相対化して考えなおす機会になったのではないだろうか。また、日本に暮らしている限り「珍奇な風習」とか「古い迷信」として他者化されがちなアフリカや太平洋の伝統について、現代的な問題として、かつ日本の伝統にも通じるものとして、理解を深めるきっかけになったと考えられる。

二〇一一年三月一八日に大阪市北区のオーバルホールにおいて、みんなく公開講演会「自然と向きあう人びとの今——太平洋とアフリカに見る」を開催。講演は本館の吉田憲司教授「アフリカ・チェワ社会における仮面舞踊の現在」および白川千尋教授「オセアニア・ヴァヌアツの伝統医療はいま」加えて、太田心平助教の司会でパネル・ディスカッションがおこなわれた。

どつぶりオセアニア——夏のみんぱく
フォーラム2011

面積のほとんどを海が占めるオセアニアの人々は西洋世界などに出会うはるか前から、高度な航海技術をはじめとした独自の文化を育みながら生活してきました。その一端を、多彩なプログラムを通じて紹介します。

◆「みんぱく映画会」/みんぱくワールドシネマ
「標定の1500マイル」
日時 7月9日(土) 13時30分～16時
(開場13時)

場所 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要

※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

◆研究公演
「フンを語る、フンを語る」
本公演では、フンの歴史と現在について専門家が解説をするのみならず、日本人フラダンサーによる本格的な踊りが生音楽とともに披露されます。

日時 7月23日(土) 13時30分～15時45分
場所 講堂(定員450名)
※参加無料、要申込
申込締切 7月7日(木) 必着

◆研究公演
「カヴァ儀礼と天地創造のドラマ」
7月30日の公演では、フィジーの伝統的なカヴァ儀礼を披露いたします。7月31日の公演では、フィジーの創世神話がフィジー人による歌と踊りにのせて上演されます。日本のイザナギ・イザナミの国産み神話とはことなるフィジー独自の創世神話に基づくドラマです。

①公演 「カヴァ儀礼」
日時 7月30日(土) 14時～15時30分
場所 本館1階エントランスホール
※参加無料、申込不要

◆研究公演
「マオリの伝統芸能カバハカ」
伝統的な唄・踊り・パフォーマンス、ニュージーランドで何世代にもわたって伝えられてきたマオリの芸能「カバハカ」を、マオリのグループ、ナ・ハオ・エ・ファが演じます。

①公演
日時 8月6日(土) 13時～15時
場所 講堂(定員450名)
※参加無料、要申込
申込締切 7月21日(木) 必着

◆「国立民族学博物館友の会」維持会員および正会員の方は優遇枠がありますので、

◆国際ワークショップ
「手話の歴史言語学」データベースの構築と一般歴史言語学における展開を目指して」
世界で話されるさまざまな手話がどのように発達したのかを研究するためのワークショップを一般に公開します。(アメリカ手話・日本手話・英語・日本語使用、同時通訳付き)
日時 7月28日(木) 8時30分～12時40分
場所 講堂(定員450名)
※参加無料、要申込(くわしくはホームページで)

◆国際シンポジウム
「アジア・太平洋地域諸言語の歴史研究の方法—日本語の起源は解明できるのか—」
日本やその周辺地域で話されることばの歴史については、まだわかっていないことがたくさんあります。研究者によるシンポジウムを一般の方にも聞いていただけるよう、公開を行います。(英語、日本語への同時通訳付き)

日時 7月30日(土) 9時～18時
場所 講堂(定員450名)
※参加無料、要申込(くわしくはホームページで)
博導連携教員研修ワークショップ2011 in みんぱく
「学校と博物館でつくる国際理解教育—新しいみんぱく展示を活用する—」

国立民族学博物館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して国際理解教育における博導連携の意義や可能性について考えます。
日時 8月5日(金) 10時20分～17時(受付10時から)
会場 セミナー室及び本館展示場内
【第1部】講演とミニシアター
【第2部】ワークショップ
※参加無料(定員に余裕があるワークショップは、当日参加も可能です。)
ワークショップ詳細や申込方法についてはホームページをご覧ください。

◆東日本大震災被災地に対する本館の取り組みについてはホームページをご覧ください。

※お問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介

■小長谷有紀・後藤正憲 共編
『社会主義の近代化の経験——幸せの実現と疎外』
明石書店 定価：6,300円

社会主義のもとで人びとはどのように幸せを実現しようとしたのか。本書は、「近代と伝統」「マテリアルと表象」「認識と信仰」「経験と記憶」をキーワードに、偏見を排し、生活実態から社会主義を明らかにする。

■梅棹忠夫 著
小長谷有紀・佐藤吉文 編著
『ひらめきをのがさない! 梅棹忠夫、世界のあるきかた』
勉誠出版 定価：2,310円

「あるきながら、かんがえる」という梅棹忠夫の思想のプロセスを追体験しながら、その極意をつかむ。稀代の探求者・観察者は世界をどのように見ていたのか。その調査のしかたを視覚的・具体的に明らかにする、実践例題集。

みんぱくはくせみナール

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です。)

第398回 7月16日(土)
「どつぶりオセアニア——夏のみんぱくフォーラム2011」関連
オセアニアへの人類の移動——島嶼環境を住みこなす
講師 印東道子(国立民族学博物館 教授)



オセアニアは海に囲まれた島世界です。紀元前1200年頃に、東南アジアから東へと船出をした人たちがオセアニア全域に広がった様子を、最新の年代を使って紹介します。また、ハワイやニュージーランド、イースター島をはじめ、資源に乏しいサンゴ島で暮らすため、どんな工夫をしていたのかを見ていきます。

第399回 8月20日(土)
「どつぶりオセアニア——夏のみんぱくフォーラム2011」関連
海に生きるくらし——島と島をつなぐ遠洋航海
講師 小林繁樹(国立民族学博物館 教授)



オセアニアでは、多くの人がひとが海とともにくらししています。海は、魚や貝などを手に入れる日常的な生活の場であると同時に、遠くはなれた島と島をつなぐ道でもあります。それは、人と人を結びつける紐帯となります。こうした海に生きるくらしは、グローバル化が進む私たちのライフスタイルにもヒントとなることでしょう。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)

第398回 8月6日(土) 15時15分～16時15分
※開催日にご注意ください
みんぱくによみがえるオセアニアのくらし
3回の収集の旅から

講師 須藤健一(国立民族学博物館長)
初めての収集の旅は民博開館直前の1977年夏でした。目的のひとつの「チユクビン」とよばれる伝統的な力ヌーは、現地でもつくられなくなっていたのですが、地元の人びとの強い願いによって民博に収蔵されることになりました。その後の調査も含めた収集資料の一部をお見せしながら、それぞれのエピソードを紹介し、民博への資料収集の意味についても考えてみたいと思います。

資料閲覧あり

第399回 9月3日(土) 14時～15時
蚊帳に見えない蚊帳のはなし
講師 白川千尋(国立民族学博物館 准教授)

ラオスの蚊帳は「虫除け」というだけではなく、さまざまな機能があり、女性の嫁入り道具にもなっています。この蚊帳との出会いは異文化にふれる醍醐味を教えてください。民博収蔵の美しい蚊帳をじっくりお見せしながらお話しします。

資料閲覧あり

第400回 10月8日(土) 14時～15時
※開催日にご注意ください

「特別展千島・樺太・北海道アイヌのくらし」関連
日本の人類学・民族学の黎明とアイヌ文化
講師 佐々木史郎(国立民族学博物館 教授)
日本の人類学・民族学は今から120年ほど前に産声をあげましたが、当時の研究者はどのようなことを考え、どのような記録を残したのでしょうか。それを知る手がかりともなるのがアイヌ文化研究です。当時収集された資料をご覧くださいながらお話しします。

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

ニュージーランドマオリのカービング

ニュージーランドの先住民「マオリ」のカービング(彫刻)は、彼らが古くから大切に受け継いできた伝統工芸のひとつです。翡翠(グリーンストーン)や動物の骨を彫ってつくった、美しく神聖なお守り・魔除けの意味合いをもっています。ひとつひとつのデザインには意味があり、マオリの人びとの大自然に対する崇拜の念がダイレクトに表現されています。

フック……釣針のかたち。航海の幸運と安全を祈る意味があります。
ツイスト……ねじれを表すかたち。絆や友情の意味があります。
クジラの尾……クジラの尾ひれのかたち。強さや尊敬の意味があります。



シェルペンダント 5,250円～6,200円
ボーンペンダント 2,900円～6,825円
グリーンストーンペンダント 9,850円～15,000円

博覧会から博物館へ

万博・民博・海洋博

うのふみお
宇野文男 福井大学教授

海洋文化館(2008年5月 撮影・久保正敏)



チエチエメニ号はミクロネシアのサタウル島を一九七五年一月二七日に出港、三〇〇〇キロの航海を経、沖縄国際海洋博覧会(七月二〇日)翌年一月一八日)会場のエキスポ港に二月二三日入港し、砂浜に展示・公開された。

その会場内で最大規模の展示ホールである海洋文化館は、政府出展の施設で、ここでは海洋文化の成り立ちとその歴史、文化の伝来と発展、民族相互の交流の姿などが展示された。展示の準備のため、博覧会開催に先立つ七三年に民族資料収集団が結成されたのである。

日本万国博覧会

じつは七〇年の大阪万博の際も、テーマ館の「太陽の塔」に展示する仮面や神像等を集めるため「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」が組織されたという先例がある。岡本太郎の要請により当時京都大学助教であった梅棹忠夫が中心となり、六八(六九年)に若手研究者約二〇名を世界各地に派遣、約二六〇〇点の資料を集め、半数以上がテーマ館の地下に展示された。それら資料はその後

うよきやくせつ
紆余曲折を経て、民博の核となる資料として展示・収蔵されることになる。

海洋民族の資料収集

万博後の跡地利用で民博の設立構想が急浮上し、それに深くかかわりはじめた梅棹は、一方で海洋博の政府出展懇談会の委員を七二年に引き受けた。京大の研究室に作戦本部をおき、海洋地理が専門の関西学院大学教授(当時)の大島襄おおしまじょうじ二氏と相談のうえ、太平洋、インド洋各地を一五地域にわけ、大学院生を中心にした資料収集団を組織した。

その事務局を担当していたわたし自身も、七四年にはマレー半島での収集に参加した。そのメンバーのうち須藤現館長をはじめ数名が民博に籍をおくのは、のちのことである。約一四〇〇点の海洋民族資料が収集され、翌春には会場に集結、海洋文化館で展示された。

沖縄国際海洋博覧会の閉幕後

博覧会後チエチエメニ号は、七四年六月に創設された民博のオセアニア展示の目玉資料として引き取られることになり、神戸までは海上輸送、そ



民博への移送直前、海洋博会場ヨットハーバーに置かれていたチエチエメニ号

こからは道路規制のため帆やアウトリガーを解体してトレーラーに載せ、七六年三月民博に搬入された。そのころはまだ建物の建築中だったので、標本資料は万博公園南側、今は住宅展示場になっている所にあった万博保税倉庫に保管されていた。倉庫前に仮小屋を設け、解体したまま翌年二月の開館まで仮置きされた。

一方、海洋博会場は国営沖縄記念公園として存続し、海洋文化館も公開されている。それを民博の沖縄分館として再利用するという動きはあったものの残念ながら実現に至らなかった。海洋文化館は三年先に再リニューアルを予定しており、その際に貴重な資料がどう生かされるか期待したい。

みんなく 私の逸品 石貨

世界最大のお金として有名なヤップ島の石貨を、みんなくは現在、八枚、所蔵している。そのなかでもっとも大きい石貨が、今年二月に新しくなったオセアニア展示に登場した。私の計測によると直径一二七センチメートル、厚み一五センチメートルと、なかなか大きい。

この石貨は当初、みんなくが開館した一年半後の一九七九年春、正面入口近くに屋外展示されたが、特別展示館の建設にもなつて取り外され、以後、収蔵庫に眠ったままとなっていた。それが四半世紀ぶりに、再び日の目を見ることになったのである。

ヤップ島では、石畳の路傍や集会所など、島の各所に直径が一メートルを超すドーナツ状の石のお金が立てかけてあり、独特な景観を形づくっている。しかし、私には子どものころに見て冒険心をかきたてられた、南洋の古い写真や挿絵などが目に浮かび、懐かしい思い出にも似た雰囲気を感じる。

石貨は結晶質石灰岩(炭酸カルシウム、霰石^{あられいし})製で、大理石の一種とあつて、研磨した面は透明な結晶を含み、美しい。かつてヤップ島から五〇〇キロメートルも離れたパラオ諸島へカヌーで出かけ、苦勞して切り出し、成形したため、その価値が生じた。

そして島民は今日においてもなお、文字どおり石のお金を使っている。ふつうの通貨としてはアメリカ・ドルを使い、銀行もあり、商店ではドルで買い物をする。しかし結婚や葬儀、集会所の落成式といった、社会関係を築き維持する儀礼的交換の場では、いまでもつてこのような伝統的な貨幣を用いているのである。

展示されたこの石貨は、現館長が若いころ、収集した資料である。個人的には、ヤップ島は私にとってははじめてのオセアニアでの調査地で、青柳真智子先生^{あおやなぎまこと}と牛島巖先生^{うしじまいわお}の助手として、一九七三年の夏、かの地を踏んだ。その後も幾度か調査にあたり、また家屋や石貨を収集した。さらに石貨をパラオまで切り出しに行くという、実験考古学的な試みを具体的に計画したこともあつて、ことに印象深い場所となっている。



標本番号 H0010156
地域 ミクロネシア連邦ヤップ州
収集年 1977年

民博 文化資源研究センター

小林 繁樹^{こばやし しげき}

「さればいざたて、アルジュナよ」

新江利彦
しんえ としひこ
京都大学助教

ベトナム中部高原の民族混住地域の歴史・文化研究者が二〇一〇年一月にインド・デリー市を訪ねたおり、叙事詩『マハーバーラタ』のクライマックスシーンとして知られるクルクシェートラ平原の古戦場址まで足を伸ばした。ベトナム山地民の叙事詩と『マハーバーラタ』との接点とは。

クルクシェートラ平原古戦場

二世紀にベトナム中部に建国されたチャンパー王国の祖は、紀元前一〇世紀のマハーバーラタ戦争で滅びたインドのクルク王家（カウラヴァ）のアシユヴァッターマン王子であると、九世紀のサンクリット碑文にいう。史実は定かではないが、ヒンドゥー教の聖典ともされる叙事詩『マハーバーラタ』は、その決戦の場を今のデリー市の北約一〇〇キロメートルのところにあるクルクシェートラ平原であると伝える。同平原は、今は巡礼者のための巨大な沐浴場となっている。

善と悪の戦い

デリー出張の直前、おりよくベトナム宗教出版社からサンスクリット原文つきで『マハーバーラタ』の「バガヴァッドギター」の章（ベトナム語訳）が出版された。ベトナム中部に現存するチャンパー王国の後継諸民族は『マハーバーラタ』を失って久しい。この出版はベトナム政府による少数民族宗教保護政策に基づくのではなく、知識人向けの商業目的である。出版社の目論見どおり、筆者は「バガヴァッドギター」を購入し、クルクシェートラの決戦についても一度おさらいをした。『マハーバーラタ』は『ラーマヤナ』と並ぶインド二大神話叙事詩のひとつで、古代インドのパラタ王家からわかれたクルク王家とパインドウ王家の内戦の淵源と結末を、神話・娯楽・哲学要素を交えながら述べたものであり、「バガヴァッドギター」はそのもつとも哲学的な部分である。それはパインドウ王家のアルジュナ王子とその師である牧神クリシュナの対話篇であり、前述のようにヒンドゥー教の聖典であって、そのテーマは運命的な義務である。クルク王家の領地（クルクシェートラ）

での決戦を目前にして、アルジュナは思い悩む。パインドウとクルクは敵同士であると同時に同じバラタ王からわかれた親戚同士であり、異父兄、友人・知人がいる。戦いたくない。戦車の御者に扮した牧神クリシュナが諭す。敵となった人びとは、善悪の道徳的判断において誤りを犯した。悪に味方した者を暴力で粉砕し悪を止めることが善の義務である。我を捨て、運命に従え、戦えと。この「戦車上で対話する二人」はインド宗教絵画の重要なモチーフとなっている。

天かける戦士のイメージ

「バガヴァッドギター」にみられる骨肉の争いや暴力、運命への諦念などの諸要素は、ベトナム中部高原に住むバナの叙事詩群とも共通する。そのバナの古老たちは、バナの若者が、テレビやビデオのワイヤーアクションを使った中国歴史活劇に夢中になってしまい、叙事詩の需要が減ったと嘆く。いっぽうで、中国活劇の目玉である「天かける戦士たち」のイメージは、バナ叙事詩とそっくりだといふ。バナ叙事詩でも、戦士たちは空を自在にかけぬぐる。

なぜバナ叙事詩は「天かける戦士たち」のイメージを中国活劇と共有しているのか。中部高原の奥地にあるバナの地では、むかしから近隣諸民族とのあいだで塩交易が発達していた。バナの近隣には、チャンパサク地方のワットプー、ジャライ地方のヤーン・ムム、ヤーン・プランなど、ヒンドゥー教遺跡が存在する。チャンパー王国時代、バナの人びとはヒンドゥー教徒の交易者もたらすヒンドゥー教の物語と歌を楽しみ、一四世紀以降、チャンパー王国とヒンドゥー教の衰退後も自己再生して楽しんでいたのではないだろうか。思えば中国活劇の元祖『西遊記』の「天かける猿」孫悟空にも『ラーマヤナ』の英雄猿ハヌマットの影響が濃くみられる。また『マハーバーラタ』には、孫悟空が乗る金斗雲の原型と思われる飛行戦車ヴィマナが登場する。中国活劇、インド叙事詩、バナ叙事詩が似ているのは偶然ではない。

英雄たちの覚悟と不覚悟

バナ叙事詩において強調されるのは、偉大な神々と称される祖先神たちから、強欲で、凶悪で、品性下劣な子孫が続々と生まれたり、もともと善良だった人びとが、突如魔が差して、殺人や強姦などの罪を犯し、憎しみ合い殺し合うようになったりすることこそ、避けようの無い厳然たる現実なのだという教訓あるいは覚悟である。「悪を討ち果たすことこそ運命」、叙事詩のなかで英雄たちは暗黒面に落ちた兄弟姉妹たちを命乞いの泣き声さえ無視して容赦なく殺していく。

しかし、『マハーバーラタ』のアルジュナはバナの英雄たちのような覚悟はできていない。アルジュナは逡巡・躊躇の末、クリシュナに「されば、いざたて、アルジュナよ」と一喝されてようやく覚悟する。それがヒンドゥーのヒューマニズムなのだろうか。筆者はアルジュナの良心に敬意を覚えると共に、その士道不覚悟ぶりに違和感も覚え、複雑な心境であった。



デリー市内で「ホーチミン（胡志明）公路」の表示を発見。インドとベトナムの友好の証だが、ホー（胡）のスペルが Ho ではなく Hoi と誤っているのが残念



クルクシェートラ沐浴場にある「戦車上で対話する二人」の巨大彫刻



バナの集会所「ホナム・ロング」。ベトナム中部高原でバナだけが見事な高層建築をつくる。バナ叙事詩もこのようなホナム・ロングにおいて囲炉裏端で語られる。



クルクシェートラ沐浴場内にある沐浴場の名は、いずれも主要な英雄名を冠する。写真はアルジュナ沐浴場の入口

「半径二〇キロ圏内じゃないから、ここは大丈夫よ」愛川町住民課窓口の通訳、遠藤由美子さんがポルトガル語で伝えている。相手は、日系ブラジル人の女性。原発事故関連の情報が知りたくて窓口に来てきたのだ。テレビで流れる日本語も英語も十分理解できぬ彼女にとってさぞかし不安であったろう。ほっとした表情で、役場をあとにする女性に視線をやりながら、三月二日以降、この種の問い合わせが急増しているのだと遠藤さんが教えてくれた。

愛川町は神奈川県中央北部に位置し、山と川にかこまれた自然豊かな町である。人口約四万三〇〇〇人のうち、六パーセントにあたる二六〇〇人が外国籍住民だ。県内で二番目に多い綾瀬市が四パーセントに満たないからいかに愛川町が突出しているかがわかる。出身地をみても、ブラジル、ペルーについて、ドミニカ共和国、中国、フィリピン、タイ、カンボジア、ラオスと国籍は多彩だ。外国籍住民が多い理由は、町の南部から厚木市にかけてひろがる内陸工業団地にある。自動車メーカーの下請企業をはじめ製造業関連の工場がひしめき、日系人を中心に外国籍住民のほとんどがここで働いている。町を歩いていると、ブラジルやタイ料理のレストランや食材店が目につく。コンビニの駐車場では夕方になるとスペイン語で雑談しているラテン系の若者にでくわす。外国籍住民が、この町の日常風景にとけこんでいるというのがはじめて愛川町をおとすれたときの印象であった。一九九〇年に入管法が改正され、日系人に対する

て勤労祭の企画にかかわった志村修さんが当時をふりかえる。国際交流クラブというボランティア団体を通じて外国人にも呼びかけ、屋台を出してもらったことにした。やがて勤労祭は口コミで広まり、群馬県大泉町からもたくさんのブラジル人がやってきた。かくして勤労祭は、「町民と外国籍住民との真の交流をめざす」愛川町の理念を体現するイベントへと生まれかわり今も続いている。

日常的に外国籍住民と接していると戸惑うこともある。「日本人の感覚と違って、時間にルーズだったり、夜遅くまで騒いだり」志村さんの正直な感想だ。しかし、「けっこう協力的で、人なつこくて陽気」なところを発見し好感をもてたのは勤労祭で一緒に働けたからだと思っている。「NGOなどが外国文化の紹介を企画してもなかなか協力してもらえないという話を聞くと、もうすこしそういうのがあってもいいのかなとは思いますが」理念より実践が生んだ貴重な経験である。

外国籍住民とともに

現在、住民課の外国籍住民相談窓口にはふたりの通訳がいる。ペルー人の遠藤さんは、一九九五年に日系人の夫と来日し、六年前からこの仕事をしている。もう一人の岩根さんは、日系ブラジル人で、通訳も一九九六年からのベテランである。

火曜日をのぞく平日の午後が二人の勤務時間だ。通訳とはいえ、業務はそれにとどまらない。役場を訪れる外国籍住民に対して「日本の法律やシステムをまず理解してもらい、そのあとで、税金、外国人登録、健康保険など担当窓口につれて

多文化を
ささえる
人びと

愛川町役場の20年 実践のなかでみつけたもの

神奈川県愛川町は工業団地を背景とした、いわば外国人集住地域のひとつである。外国人との接触は日常的で、彼らの存在は町の風景の一部となった。このような町もいまや特殊なものではなくなりつつある。外国人も住民として受け入れはじめた愛川町の取り組みを、役所をとおして見てみた

くぼた さとる
窪田 暁
総合研究大学院大学博士後期課程

る就労制限が緩和されるとブラジルやペルーから多くの日系人が来日した。しかし、「急に二〇〇〇人の外国人が押しよせたわけではなく、じわじわ増えて、あれっ最近多くなってる？」ってな感じでした」と行政推進課の阿部昌弘さんが回想する。「彼らとは中学のときから日常で接していたので特別な感情はないですね」と語るのは、この町で育った企画政策課の春口孝之さん。九〇年からの三年間を地元の公立中学校で過ごし、それがあたりまえのことだと感じていた。入管法改正から二〇年。外国籍住民が多く暮らす自治体は彼らとどのように向きあってきたのだろうか。

勤労祭で国際交流

愛川町役場には外国籍住民のみを担当する部署は存在しない。外国籍住民には、通訳をとおして日本人と同じサービスを提供するのが基本方針である。それでも家庭ゴミの収集を担当する環境課は、外国籍住民のゴミの出しかたについて、六カ国語で「ごみの分別ガイド」を作成したり、騒音への苦情がくれば、自治会を通じて張り紙してもらおうなど、各担当課が必要に応じて外国籍住民とかかわってきた。一方で、外国籍住民が多く暮らす環境を積極的に町の施策に活かしていこうという試みもなされている。

毎年、盆踊りの時期になると勤労祭というイベントがひらかれる。一九九七年、会場が工業団地内に向つたのを機に、内容もリニューアルすることになった。「そこで盆踊りにかわるものとして思いついたのがサンパでした」商工課の職員としていく」とのこと。「なぜ、病院にかかったことがないのに保険料を納めないといけないのか」「どうして、なんでも文書で送られてくるの」「自分たちの経験からいっても、日本の文化や習慣はわからないことばかりだった。遠藤さんは、日本人と外国籍住民が互いに無関心のまま生活するのではなく、隣人として理解しあう個人の努力が不可欠だと考えている。

最後の相談にやってきたのは、日系ドミニカ人の女性。夫あてに人間ドックの案内が届いたが日本語でよくわからないとのこと。彼女も日本のシステムにはまだなれないのだとこぼす。遠藤さんにスペイン語で町からの補助などについて説明されようやく納得したようだ。「自分でよく考えるのよ。健康には気をつけてね」この日の遠藤さんの仕事が終わった。

外国人を住民として受けいれるためさまざまな制度や法律は確かに欠かせない。しかし目立たずとも、一人ひとりを大切に努力と気配りが何にもまさると感じさせられた一日であった。

勤労祭に外国籍住民が出店した屋台



勤労祭のサンパショー



ブラジル料理の食材店



相談窓口に来てきた日系ドミニカ人の女性と遠藤さん

祖先とともに 過ぐす夏

中国雲南省ペー族の場合

人びとの絆の更新

その季節は旧暦六月二五日の松明祭りから始まる。人びとは地域ごとに力を合わせ、一〇メートルもの松明をつくる。芯になる木に麦藁や籐竹を巻き、普通の年は一二、閏月のある年は一三の輪で留めつける。男たちが三方向から綱を引いて松明を立てる。日暮れに点火。人びとは落ちてくる火の粉をあびながら松明の周囲をまわり、一年の息災を祈る。

きた。地域や家族の人びとの結びつきが再確認される祭りといえよう。

次の世代への願いをこめて

松明祭りではときを超える人びとの夕テの繋りも意識される。長老が地域を代表して祈りを捧げ、最後の宴には高齢者全員が招待される。他方、次代を担う子ども誕生に向けた願いも、こめられる。

家から提供するのが習わしであった。しかし、それは一九八〇年代ごろまでのこと。現在、人びとは、枅飾りはもう贈れないと口ぐちにいう。

大学合格者が年々増加し、九月の新学期前の夏にあらためて入学の祝宴をするのが一般化し、盛大さもエスカレートしてきたからだと思われる。全国的にも農村を中心にその傾向が高まっているが、雲南のペー族の場合、数十卓、数百人の祝宴もある。

祖先を迎え、送る

旧暦七月一日、家々では普段は二階に置いてある祖先の位牌を階下に降ろし、花や果物を供える。夕食ができるご馳走をお盆に載せて門の外まで運び、冥界でのお金となる「紙銭」を燃やして、祖先を迎える。

から一万元くらいまで（一元は約一三円）いろいろなタイプが売られる。

親族集団単位の祖先祭祀が続けられているのも、ペー族の特徴である。

一年以内の故人は特別に扱ひ、白い喪の装束を着て迎え、送るときは一般の祖先よりも一日から数日早く、親族友人を招待して、多くの紙銭と冥衣を燃やして盛大におこなう。

この数十年、中国では伝統的宗教儀礼の多くが「封建的迷信」として否定されてきた。ペー族の人びとも時代に合わせて伝統を変化させてきた。しかし、祖先と交流し、互いの絆を確認する夏の行事は、経済的豊かさとともにむしろ盛んになってきている。周辺に広がった住宅地では、松明を立てる地縁グループがあらたに組織された。村の民間僧は、松明祭りの前から中元節までの時期、新築の家に新しい祖先の位牌を安置する儀式のために、数軒を掛けもちで、忙しい日々を過ごしている。



一足早く家からあの世に戻る「新仏」に捧げる冥衣と紙銭を火にくべる人びと(2010年撮影)

「慈愛」に覆い隠された 僧侶のジレンマ

おかべ まゆみ
岡部 真由美
大谷大学助教

「慈愛」に満ちた僧侶

北タイにおける最大の都市チェンマイ。そのチェンマイ市街地から、北東へわずか二〇キロメートルほど離れたところに、わたしがほぼ毎年調査に訪れる、ひとつの仏教寺院がある。今年で六六歳を迎える、この寺の住職は、いつも優しい微笑みをたたえ、落ち着いた雰囲気包まれている。穏やかな声に、上品な立ち居ふるまい。会話の端々に冗談を織り交ぜる茶目っ気だっている。そんな住職は、「僧侶は社会のために働かなければならない」という考えの持ち主である。

タイをはじめとする東南アジア大陸部で広く信仰されてきた上座部仏教の僧侶たちは、一般的に、戒律を厳しく守ることで知られている。戒律を守り、經典学習と瞑想修行に勤しむことで、涅槃を目指す僧侶たち。その彼らを、衣食住のあらゆる面からサポートすることで、徳を積む在家者たち。この明確な線引きこそが、両者を、儀礼や日常のさまざまな場面を通じて互恵的に結びつけているのである。

ではなぜ、「僧侶は社会のために働かなければならない」という考えが、寺の所有地と一般の土地の区別はつかない。この境界が曖昧な場所に、異なる宗教や民族を背景にもつ人が、全国各地から移住することによって、インフォーマルな居住空間が形成されているのである。

タイでは、寺の所有地は、法的に自由な売買が禁じられている。しかし、この寺の所有地内に暮らす住民のなかには、そのことを知りながらも、現金収入をえようと第三者に転売したり、賃貸したりする者が後を絶たない。また、住民の大半は、建設、洗濯、草刈りなどの賃労働や、市場での物売りで生計を立てる低所得層である。しかし、住民たちが昼間から、けななしの金で酒盛りを楽しむ風景は、ここでの日常と化している。住民たちに関するこうした情報は、回って住職の耳にも届いている。違法とわかっていながら、なぜ土地の売買や賃貸を続けるのか。経済的に困窮するなら、なぜ必死で働かな



寺の所有地内で洗濯業を営むスリムの親子



儀礼後の饗食で在家者と語る住職

ばならない」のだろうか。その理由を、住職は、經典に依拠して、仏陀が弟子に捧げた任務だからだと説明する。僧侶は日々、在家者のサポートなくしては生きられないから、在家者が困難に直面した際には、共に解決にあたることでの

ジレンマとの戦い

しかしながら住職が、寺の所有地から住民たちを強制的に排除したり、罰金を課したり、あるいは監視を強化したり、といった強硬策に乗り出したことは一度もない。住職が講じてきたのは、せいぜい、所有地内に看板を設置し、無断で家を建てないように呼びかけたことや、所有地内の住民のみを対象とする基金を設立し、住民同士の相互扶助を奨励したことくらいである。もちろん、これらの遠回しな方法はいずれも、まったくといってよいほど、住職が期待するような効果を生まなかつた。他にも、住職は、賃借料の徴収を開始すると何度もいいながら、

住民たちの不法行為や生活態度が目に見えることとは、所有地の管理・利用に責任を負う住職にとって、都合のよくない話である。なぜなら、このまま放っておくと、寺の評判を落としかねないからである。かといって、住民たちに対して強硬策に出るわけにもいかない。なぜなら、もしそうすれば、住民たちのあいだで不満の声が噴出するだけでなく、他の村人たちからも「心が狭い」と非難されるに違いないからである。これでは、「慈愛」に満ちた僧侶とい

「返礼」しなければならぬ、と。住職がこれまで約三〇年間、農民の貧困、エイズ、高齢者や森林保護にかかわる活動を熱心におこなってきたのは、何が「社会のため」になるのかという問いに対する、住職なりの答えであった。村人たちは、この住職のことを、「慈愛」に満ちた僧侶として高く評価していた。

心優しくばかりはいられない

調査を続けるうちに、わたしは時折、この「慈愛」に満ちた僧侶が、人知れず、頭を悩ませている場面に遭遇するようになった。「ルーアンポー（僧侶の自称）だつて、いつも心優しくばかりはいられない」。これはあるとき、住職が、わたしに向かって吐き捨てるようにつぶやいたことばである。

住職の悩みの種は、寺の所有地内に暮らす住民の存在にあった。この寺は、小高い山の上に建てられており、山の頂からすそ野にかけての土地すべての所有権を有している。しかし、寺の所有地と一般の土地が接する、すそ野部分においても、寺の所有地を示すような囲いは設置



寺の所有地内にある山地少数民族の家屋

うイメージに傷をつけてしまう。住職にできることは、住民たちの様子にアンテナを張り巡らせつつ、事態をこれ以上深刻化させないために、ときにやんわりと釘を刺すことだけである。僧侶の「慈愛」とは、こうしたジレンマのうえに成り立っているのである。

今日のタイ社会においては、この住職のように、開発の進展に伴って生じたさまざまな現実的課題の解決に、自ら積極的に取り組む僧侶が少なくない。しかし彼らには、個々の課題を解決するスキル以上に、在家者とのほどよい距離のなかで、自らに与えられた良きイメージを保ち続けることができるか否か、その力が試されているのである。

7月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分（★7月31日を除く）

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」
などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

※「どっぷりオセアニア—夏みんなくフォーラム2011」期間中はオセアニアに関するお話を届けます。

3日
(日)

話者：印東道子（国立民族学博物館 教授）
話題：ココヤシとオセアニアの暮らし
場所：オセアニア展示場

10日
(日)

話者：須藤健一（国立民族学博物館 館長）
話題：海の民と船
場所：オセアニア展示場

17日
(日)

話者：久保正敏（国立民族学博物館 教授）
話題：オーストラリア・アボリジニの世界
場所：オセアニア展示場

24日
(日)

話者：林勲男（国立民族学博物館 准教授）
話題：南太平洋の宣教師
場所：オセアニア展示場

31日
(日)

時間：11時から12時★
話者：丹羽典生（国立民族学博物館 助教）
話題：オセアニアの天地創造とドラマ
場所：オセアニア展示場

1年間みんなくに何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
- ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
- ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893/平日9:00~17:00)

編集後記

開業が大震災翌日ゆえ放映が延期された「九州新幹線全線開業」CM、そこに映る沿線縦断一万人余の笑顔のウェーブから、何かに心を寄せる一体感が伝わる。これでわたしが思い出したのは「災害ユートピア」論だ。

はじめて知ったのは、歴史学者の北原糸子著『地震の社会史』。氏によれば、安政江戸地震後に、生き延びた安堵感や非日常的開放感、救済事業による活況などにより、庶民にかりそめの桃源郷が出現したという。また、米国のノンフィクション作家レベッカ・ソルニットの近著『災害ユートピア(原題はA Paradise Built In Hell)』も、1906年サンフランシスコ大地震から近年の災害までを題材に、日常の格差や制約が崩壊し平等となった被災者のあいだや支援者とのあいだに、相手に寄り添おうとする利他的な共同体が立ち上がる多くの例を紹介している。しかし、非日常は長くは続かず、やがて日常が息を吹き返す。

現実には災害の影響と被災者の苦況は長く続く。せめてわたしたちはそれを忘れず、寄り添う心、共同体意識を何らかの形で明日につなげたいと願う。

今号から編集委員一部が交替し、少し若返ったことを報告申し上げる。(久保正敏)

●表紙：装身具(頭かざり) 地域 ソロモン諸島 標本番号 H0138435

次号の予告

特集

われらをとりかこむ海(仮)

月刊みんなく 2011年7月号

第35巻第7号通巻第406号 2011年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂
編集委員 久保正敏(編集長) 樫永真佐夫 川口幸也
庄司博史 菅瀬晶子 中牧弘允 山中由里子
編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一欽
制作・協力 財団法人 千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園-日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

